



裏表紙

表紙

書 名：

平成23年度企画展

縄文土器と動物装飾 2

出版年月： 2012(平成24).1

著 者： 富士見市立水子貝塚資料館

本サイズ： A4サイズ(210×297mm)

ページ数： 25P

※当企画展の図録は水子貝塚資料館で販売（在庫の場合）

なか見！検索 コンテンツ：

- ・開催にあたって
- ・目次
- ・縄文土器と蛇の装飾
- ・器面の蛇（一部抜粋）
- ・付編1 展開写真でみる縄文土器の文様構成（一部抜粋）

開催にあたって

平成 21 年度に企画展「縄文土器と動物装飾」を開催しました。埼玉県指定有形文化財となっている富士見市羽沢遺跡出土の「獣面装飾付土器」の「獣面」は何の動物を表現したものか、どのような課程で成立したのかをテーマに、土偶・人面、猪といった関連する装飾の付いた土器を多数展示し、好評をいただきました。しかし、蛇を意匠化したものとして考古学の論文や専門書で紹介されることが多くなった「獣面」の対面に位置する「尻尾」のような装飾については、十分な紹介ができず課題として残りました。

そこで、今回は第 2 弾として、蛇の装飾が付いた土器を特集することとなりました。蛇は、その特異な姿から苦手とする人が多い生物ですが、古くから家の神、蓄財の神、水の神など神格化され信仰の対象となってきました。縄文人も蛇に対して何らかの信仰心があり、それが土器の文様と結びつき表象したのが蛇装飾と考えられています。そして、蛇装飾が施された土器は、単なる煮炊きの道具ではなく、日常的に使用するものとは目的や用途が異なる特別な容器だったとも考えられています。

そうした視点から今回の展示をご覧いただき、それらが何のために作られ、どのように使用されたのかを推理しながら、約 5,000 年前の縄文人の文化に触れ、彼らが生きた時代を思い描いてみてください。

最後に、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の出品にご快諾いただいた皆様、並びにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

平成 24 年 1 月 15 日

富士見市立水子貝塚資料館

目 次

開催にあたって	
目 次	
例 言	
縄文土器と蛇の装飾	1
器面の蛇	2
とぐろの蛇	
垂直の蛇	
口縁の蛇	7
とぐろの蛇	
大型のかまくびの蛇	
小型のかまくびの蛇	
環状のかまくびの蛇	
横向きのかまくびの蛇	
付属の蛇	18
人面装飾の蛇	
大型装飾の蛇	
猪装飾と土偶装飾（追補）	20
付編 1 展開写真でみる縄文土器の文様構成	22
付編 2 縄文中期の土偶（人面）装飾付土器の系譜	24
協力者・協力機関	
主な参考文献	

縄文土器と蛇の装飾

縄文時代中期中頃（約 5,000 年前）に南関東・甲信地方を中心に分布する勝坂 3 式（甲信地方では井戸尻式）土器に蛇や猪などの動物をかたどった装飾が施されるようになりました。人の顔や体をモチーフとした装飾はそれ以前から存在していましたが、蛇や猪の装飾は突如出現します。なぜこの時期に流行したのかははっきりしませんが、縄文人が信仰していた女神が偶像化されたといわれている土偶がしばしば土器にもつけられており、これと同じような理由が成立の背景にあるようです。蛇は、貝塚から骨が発見されていることから食料ともされていたようですが、猪とともに縄文人が神として崇めた動物とされています。足のない細長い体とそれをくねらせて地をはう姿は、他の動物にはない生態です。さらに、何度も脱皮を繰り返し成長する強い生命力があり、マムシのように毒をもつものもあります。加えて、石棒と同様に男性の象徴としてもとらえられることなどから信仰の対象となり、安産、子孫繁栄、豊穰、死後再生などが祈願されたという説が一般的です。

一方で、蛇装飾が成立する以前から土器には渦巻状や環状の文様が多用されており、それが蛇の体のように見えたことから、結果的に頭が付けられて蛇になったという考えもあります。

こうして成立した蛇や猪の動物装飾ですが、そう長くは続きませんでした。南関東地方では、勝坂式土器とはまったく異なる加曽利 E 式が新たに成立しました。この土器には動物装飾は一切用いられることはなく、それまでの伝統は途絶えました。甲信地方では勝坂式土器から直接変化した曾利式土器の初期の段階まで継承されています。しかし、加曽利 E 式土器の影響を強く受けるようになると消滅してしまいます。

土器に施されている蛇装飾は、「ヘビ文」「蛇体文」などと呼ばれ、大きな口をもつ頭が特徴であり、他の類似文様と区別する目印となります。頭の形が三角のものがあることからマムシとの見方もあります。蛇というと、とぐろにかまぐびをもたげた姿を思い浮かべます。土器の蛇装飾にもそうした構図を見て取ることができます。縄文人も蛇に対し現代の私たちと共通する思考をもっていたのでしょうか。



1 参考 縄文中期中頃（約 5,000 年前）の勝坂 3 式土器群 富士見市松ノ木（まつのき）遺跡出土 当館蔵
松ノ木遺跡 35 号住居跡から一括出土した土器。勝坂式土器には様々な器形や文様の土器があり、こうした中に蛇装飾付土器も含まれている。

この項目内から、その一部抜粋

器面の蛇

土器の胴部に貼り付くように施される蛇装飾は、渦巻状の隆線のものや垂直状の隆線のものがあります。

とぐろの蛇

渦巻は、蛇が体を丸めたとぐろ状態を表現していると思われます。頭が上に付いていることから、とぐろをほどき、口縁へはいあがろうとしているようにも見えます。とぐろの蛇装飾は、1体のみが施文されるもの、2体が対になって施文されるもの、人面装飾や猪装飾と組合わさって施文されるものがあり、深鉢形土器をはじめ有孔罍付土器や浅鉢形土器にも用いられています。また、山梨県を中心に長野県から埼玉県まで広範囲に分布が認められます。蛇装飾の基本形であり、代表的なものの一つといえます。

主な出土遺跡

深鉢 長野県：榎垣外遺跡（岡谷市）、下原遺跡（富士見町） 山梨県：原町農業高校遺跡・甲ッ原遺跡・海道前C遺跡（北杜市） 東京都：多喜窪遺跡（国分寺市） 神奈川県：川尻遺跡（相模原市）、原口遺跡（平塚市）、大熊仲町遺跡（横浜市） 埼玉県：海谷遺跡（所沢市）、西原大塚遺跡（志木市）、谷津遺跡（富士見市）

有孔罍付土器 長野県：花上寺遺跡（岡谷市）、藤内遺跡（富士見町） 山梨県：安道寺遺跡（甲州市） 神奈川県：林王子遺跡（厚木市） 埼玉県：行司免遺跡（嵐山町）

浅鉢 東京都：多摩ニュータウンNo.72 遺跡（八王子市）



2 蛇装飾付深鉢形土器 東京都八王子市多摩ニュータウンNo.72 遺跡出土 東京都教育委員会蔵 東京都埋蔵文化財センター一保管 勝坂3式 器高(26.0)cm 口径16.0cm 底部欠損
円筒形の深鉢に一對の目の付いたとぐろの蛇が施されている。

この項目内から、その一部抜粋

付編1 展開写真でみる縄文土器の文様構成

縄文時代中期の勝坂式土器の胴部文様は、通常は2単位もしくは4単位に割付けされ、対になるように施されています。しかし、よく見ると対の関係にある主要文様の隆線の形や隆線の隙間に充填される沈線が微妙に異なっています。口縁部に施される突起や大型装飾、猪装飾や人面装飾も左右の文様が違います。縄文土器には、器形や文様など製作上様々な規範が存在します。勝坂式土器には文様を対称としない「非対称のルール」が存在します。土器の胴部文様を3単位や5単位に割付けしたものもありますが、これは主要文様の配置が対称とならないように意識した結果と思われます。現代人の感覚だと対称とするのが普通なのですが、縄文人にとってはあつてはならないものであり、美的感覚とは別の深い理由があったにちがいありません。

そうした実例を富士見市内の遺跡から出土した土器の360度の展開写真（撮影小川忠博氏）で観察してみましょう。



深鉢形土器 埼玉県富士見市松ノ木遺跡出土 勝坂3式 器高38.0cm 器高35.5cm 口径20.0cm 2単位文様



深鉢形土器 埼玉県富士見市松ノ木遺跡出土 勝坂3式 器高34.0cm 口径19.0cm 2単位文様



深鉢形土器 埼玉県富士見市松ノ木遺跡出土 勝坂3式 最高33.5 器高29.5cm 口径22.0cm 2単位文様



深鉢形土器 埼玉県富士見市松ノ木遺跡出土 勝坂3式 最高41.5 器高39.0cm 口径25.0cm 4単位文様